様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１３５６３

研究課題名（和文）日本列島北部における新石器型狩猟採集社会の形成過程

研究課題名（英文）A Study on the Formation Processes of Neolithic Hunter-gatherer Societies in the Northern Part of the Japanese Archipelago

研究代表者
夏木　大吾（NATSUKI, DAIGO）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・助教

研究者番号：６０７５６４８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本列島北部地域、特に北海道の更新世～完新世移行期を対象として、縄文・新石器型狩猟採集社会の文化形成プロセスを研究し、以下のような変化を明らかにした。①晩氷期前半の温暖期（約15000～13000年前）に本州から到来した縄文草創期文化と在地の旧石器時代終末文化が北海道で併存するが、②晩氷期後半の寒冷期（約13000～11500年前）には縄文文化の空白が生じる。③気候が安定する完新世初頭に、在地の伝統を引き継いだ縄文早期初頭文化が出現し、徐々に定着性の高い狩猟採集社会が形成される。

研究成果の学術的意義や社会的意義
土器出現は人類史の画期を代表する事象として考古学では注目されてきた。世界各地で多くの研究事例があるが、土器出現や技術拡散のプロセスの多様性については未だ不明な部分が多い。本研究では、土器利用を含む新石器的な社会や文化の形成過程を具体的な考古学的現象とその時間的変化によって示し、地域的なモデルを提示した。こうした研究は、従来の一国史的な縄文時代研究では軽視されてきた、日本列島内の多様な先史社会・文化の形成プロセスを理解するうえでも有益である。

研究成果の概要（英文）：This research focusing on the northern part of Japanese archipelago shows formation processes of Jomon/Neolithic hunter-gatherer societies as follows. 1; During the warmer period of the Late Glacial(ca. 15,000-13,000 yBP), the Incipient Jomon culture from the Paleo-Honshu Island coexisted with native cultures (the Terminal Upper Paleolithic cultures), 2; during the colder period of the Late Glacial(ca. 13,000-11,500 yBP), the Incipient Jomon culture was disappeared from Hokkaido. The Initial Jomon culture on Hokkaido, which appeared at the onset of the Holocene, although maintains relationship with those of Honshu, was in the tradition of antecedent TUP cultures. Jomon/ Neolithic hunter-gather societies on Hokkaido, compared with those of Honshu Island, went on intensively distinctive historical process under the climate change in the transition from the Pleistocene to the Holocene, regional setting of ecology and culture.

研究分野：先史考古学

キーワード：日本列島北部　更新世～完新世移行期　新石器型狩猟採集社会　生業戦略　居住形態　文化的影響関係

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、「縄文文化」の地理的範囲を考える研究が活況を呈している。そもそも縄文時代は日本の一国史を前提として作られた新石器時代のユニークな時代区分であり、「縄文文化」は土器型式の類似に基づいた考古学的文化でありながらも、実際には際立って異なる地域的文化をも包摂してきた。そのような動きのなかで特に注目されているのが、更新世末から完新世初頭（15000～8000 年前）における日本列島北部の先史文化である。北海道は「縄文文化」の北の前線として注意され、道東の特異な「縄文文化」には大陸からの要素が含まれると期待されてきた。しかし、2000 年代になるまで、北海道では縄文草創期～早期前葉の事例が乏しく、かつ出土状況の問題もあり、その存否も含めて議論の進展はなかった。そのため、北海道における縄文時代初頭文化の議論は、発掘調査成果の蓄積が多く、考古学的構成内容も豊富な縄文早期中葉以降が中心となっていたが、後期旧石器時代終末期と縄文時代早期中葉の考古学的証拠との間には年代・内容的な断絶が大きかったため、北海道の旧石器～縄文時代移行期には考古学上のミッシングリンクが存在していた。

近年になり、大正 3 遺跡、大正 6 遺跡、旧白滝 5 遺跡など縄文時代草創期～早期前葉の考古学的存在が確認され、ミッシングリンク解明の糸口が見えてきた。このような中、研究代表者は、新たな縄文草創期遺跡を発見した。したがって、こうした資料の調査研究に基づき、本格的に北海道の先史時代の空白を埋め、日本列島北部における縄文・新石器的狩猟採集社会の形成にアプローチすることが可能になってきた。

２．研究の目的

「縄文文化」と周辺の新石器社会との境界をめぐる議論の中で文化の地域的多様性が注目を集めており、日本列島北部における先史文化は際立った特徴を有することが指摘されている。なかでも、北海道では更新世末～完新世初頭における新石器的な定着的狩猟採集民社会の成立過程で、地域生態に応じて文化の地域性が顕著になっていくことが特に注視されている。本研究では、北海道を対象として、この人類史上最大の環境変動期において生じていた生業や居住形態の変化といった生態適応について、遺跡の発掘調査と既存資料の比較分析によって明らかにするとともに、地域社会・集団間の文化的影響関係を東北地方やロシア極東を含めた考古資料によって解き明かすことによって、生態適応と文化接触という視点から新石器型狩猟採採集社会の形成過程について解明する。

３．研究の方法

本研究では北海道を中心とする日本列島北部における新石器型狩猟採集社会の形成過程に対して２つのテーマ、すなわち①生業戦略と居住形態の研究、②文化的影響関係の実態解明を設定してアプローチする。テーマ①では、重要な成果が期待される遠軽町タチカルシュナイ遺跡の発掘調査を実施して新たなデータを得るとともに、列島北部の更新世末～完新世初頭を対象として考古資料のデータベース化と分析を行い、生業道具や居住行動の地域多様性と変遷について詳細に検討する。テーマ②では、最近出土資料が増加しつつあるロシア極東地域の関連する新石器文化初頭についてのデータを収集し、環日本海北部地域における文化的影響範囲の時間的変動とその広域的な背景を明らかにする。

４．研究成果

（１）2017 年度は、①北海道タチカルシュナイ遺跡 M-I 地点の発掘、②北海道と東北北部における既存資料の分析、③アムール川下流域の既存資料の分析を進めた。タチカルシュナイ遺跡 M-I 地点の発掘では、石器集中部が検出され、それらに伴う炭化物集中の炭素年代測定では晩氷期前半の年代が得られ、縄文時代草創期であることが確実となった。これにより信頼性の高いデータに基づいて、縄文草創期文化の北の広がりが議論可能となった。これら 2017 年度調査の成果を日本旧石器学会、東北日本の旧石器文化を語る会で報告した。

本州―北海道間における文化的影響について明らかにするために、北海道と青森県の遺跡出土資料や採集資料を実見し、分析した。得られた知見とデータベースに基づき、北海道の広い範囲において縄文時代草創期文化関連の遺物が分布することが明らかになった。また、更新世～完新世移行期における考古学的文化の地域間での併行関係を一定程度整理できた。

更新世・完新世移行期の文化形成について広域的な視点から列島北部を評価するために、ロシアのハバロフスク地方郷土博物館にて、晩氷期に位置づけられるノヴォトロイツコエ 10 遺跡、オシノヴァヤレーチカ 10・12 遺跡、ゴンチャルカ 1 遺跡の資料を実見した。北海道とは直接的な関係性は見いだせなかったが、類似した生態適応の方向性が捉えられた。

（２）2018 年度は、①タチカルシュナイ遺跡 M-I 地点の継続調査、②北海道と東北北部での資料の分析とデータの整理をさらに進めた。タチカルシュナイ遺跡 M-I 地点の発掘では、数多くの多様な石器と小片化した土器が発見された。多様な資料が出土したことにより、当時の生活や文化的特徴を知るための多くのてがかりを得ることができた。この成果は北海道考古学会で報告した。

本州―北海道間における文化的接触について明らかにするために、北海道と青森県、岩手県の遺跡出土資料や採集資料を実見し、分析した。その結果、北海道の新石器型狩猟採集社会の形成

をめぐっては、晩氷期前半（15,000～13,500 年前）、完新世初頭（11500～10,000 年前）の二度の期間で、本州からの大きな文化的影響があることが絞り込めてきた。北海道における縄文時代草創期文化の内容と特徴、分布、年代を整理・考察し、その成果を論文にまとめ、日本旧石器学会の口頭発表でも報告した。

（３）2019 年度は①タチカルシュナイ遺跡の発掘を完了させ、基礎資料の分析と整理を進め、成果報告を兼ねて課題の解明に向けた総括を行った。また、②道北とサハリンにおいて既存資料の探索と分析を進めた。タチカルシュナイ遺跡 M-I 地点の発掘調査では爪形文土器が検出され、土器を伴う草創期文化が北海道オホーツク海側地域に到達したことが明らかにされた。本年度で発掘調査を終了し、発掘調査報告書としてとりまとめた。発掘調査報告では、北海道における縄文草創期文化の特徴を多角的な分析から行動論的に抽出し、同時併存する後期旧石器時代終末期文化との主な違いを明確化した。サハリンと北海道における考古資料の比較研究では、更新世～完新世初頭において多くの共通点が見出された。報告書の他にも、日本旧石器学会や日本考古学協会、北海道考古学会、東北日本の旧石器文化を語る会などの学会での口頭発表、論文として成果を報告した。北海道における新石器型狩猟採集社会の形成過程について概要をまとめ、「北海道における縄文時代の始まり」と題して、紋別市が主催する「第 27 回環オホーツク文化のつどい」においても一般向けの研究発表を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Sato, H., Natsuki, D.	４．巻 441
２．論文標題 Human behavioral responses to environmental condition and the emergence of world’s oldest pottery in East Asia, Northeast Asia: An overview	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Quaternary International	６．最初と最後の頁 12-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Morisaki, K., Natsuki, D.	４．巻 441
２．論文標題 Human behavioral change and the distributional dynamics of early Japanese pottery、Quaternary International	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Quaternary International	６．最初と最後の頁 91-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 夏木大吾	４．巻 5
２．論文標題 北海道における縄文時代草創期文化	５．発行年 2018年
３．雑誌名 論集忍路子	６．最初と最後の頁 59-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩瀬彬・夏木大吾・出穂雅実	４．巻 5
２．論文標題 美幌町豊岡7遺跡の忍路子型細石刃核を伴う石器群の使用痕分析	５．発行年 2018年
３．雑誌名 論集忍路子	６．最初と最後の頁 35-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 夏木大吾	4．巻 11
2．論文標題 枝幸町内採集の旧石器・縄文時代石器	5．発行年 2020年
3．雑誌名 枝幸研究	6．最初と最後の頁 13-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 夏木大吾	4．巻 3
2．論文標題 東北日本における稜柱系細石刃石器群	5．発行年 2020年
3．雑誌名 福岡大学考古学論集	6．最初と最後の頁 3-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 夏木大吾	4．巻 56
2．論文標題 遠軽町タチカルシュナイ遺跡M-I地点の調査概要	5．発行年 2020年
3．雑誌名 北海道考古学	6．最初と最後の頁 21-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 夏木大吾	4．巻 100
2．論文標題 北海道における更新世・完新世移行期の土器出現と文化現象	5．発行年 2020年
3．雑誌名 物質文化	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計17件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 夏木大吾・國木田大・佐藤宏之・青木要祐・太田圭・増子義彬・熊木俊朗・本吉春雄
２．発表標題 北海道遠軽町タチカルシュナイ遺跡M-I地点出土の縄文時代草創期石器群
３．学会等名 日本旧石器学会第16回研究発表・シンポジウム
４．発表年 2017年

１．発表者名 Natsuki, D.
２．発表標題 Coexistence of the Terminal Upper Paleolithic culture and the Incipient Jomon culture in Hokkaido, northeastern Japan
３．学会等名 The 22(2)nd Suyanggae International Symposium in Sakhalin “The Initial Human Explaration of the Continental and Insular Parts of the Eurasia. Suyanggae and Ogonki”（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 夏木大吾・太田圭・増子義彬・青木要祐・佐藤宏之・國木田大・熊木俊朗・本吉春雄
２．発表標題 北海道遠軽町タチカルシュナイ遺跡M-I地点2017年度調査
３．学会等名 第31回東北日本の旧石器文化を語る会
４．発表年 2017年

１．発表者名 夏木大吾・太田圭・増子義彬・青木要祐・佐藤宏之・國木田大・熊木俊朗・本吉春雄
２．発表標題 北海道北見市吉井沢遺跡の調査成果（第11次）
３．学会等名 第19回北アジア調査研究報告会
４．発表年 2018年

１．発表者名 大貫静夫・佐藤宏之・國木田大・夏木大吾
２．発表標題 北アジアにおける新石器化についての研究－2017年度－－沿バイカルにおける更新世・完新世移行期の研究－
３．学会等名 第19回北アジア調査研究報告会
４．発表年 2018年

１．発表者名 夏木大吾
２．発表標題 北海道における旧石器／縄文時代移行過程を考える
３．学会等名 北海道旧石器文化研究会2017年度定例研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 夏木大吾
２．発表標題 北海道における縄文時代草創期文化の石器群
３．学会等名 日本旧石器学会第16回研究発表・シンポジウム
４．発表年 2018年

１．発表者名 Natsuki, D.・Sato, H.
２．発表標題 Different spatial activity in the Late Glacial microblade site:A case study based on the Yoshiizawa site of northern Japan
３．学会等名 The 23rd Suyanggae International Symposium in Malaysia “Suyanggae & Lenggong: Prehistory Adaptation”（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 夏木大吾・太田圭・青木要祐・張恩惠・佐藤宏之・熊木俊朗
２．発表標題 遠軽町タチカルシュナイ遺跡M-I地点
３．学会等名 2018年度北海道考古学会遺跡調査報告会
４．発表年 2018年

１．発表者名 夏木大吾・太田圭・西村広経・山田貴博・渡邊怜・佐藤宏之・熊木俊朗
２．発表標題 北見市吉井沢遺跡
３．学会等名 2018年度北海道考古学会遺跡調査報告会
４．発表年 2018年

１．発表者名 夏木大吾・太田圭・西村広経・山田貴博・渡邊怜・佐藤宏之・熊木俊朗
２．発表標題 北海道北見市吉井沢遺跡の調査成果（第12次）
３．学会等名 第20回北アジア調査研究報告会
４．発表年 2019年

１．発表者名 福田正宏・M. Gablirchuk・國木田大・田尻義了、M. Gorshkov・江田真毅・木山克彦・A. Malyavin・夏木大吾・足立達朗・張恩惠・太田圭・田邊えり・熊木俊朗
２．発表標題 ロシア・ユダヤ自治州における考古学的調査（2017・2018年度調査）
３．学会等名 第20回北アジア調査研究報告会
４．発表年 2019年

１．発表者名 夏木大吾
２．発表標題 北海道における土器出現期の文化現象
３．学会等名 日本考古学協会第85回総会研究発表
４．発表年 2019年

１．発表者名 夏木大吾
２．発表標題 タチカルシュナイ遺跡M-I地点における縄文時代草創期文化の石器製作技術
３．学会等名 日本旧石器学会第17回研究発表・シンポジウム
４．発表年 2019年

１．発表者名 夏木大吾
２．発表標題 北海道における縄文時代のはじまり
３．学会等名 第27回環オホーツク文化のつどい（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 夏木大吾・太田圭・青木要祐・張恩惠・萩野はな・國木田大・佐藤宏之・熊木俊朗
２．発表標題 遠軽町タチカルシュナイ遺跡M-I地点
３．学会等名 2019年度北海道考古学会遺跡調査報告会
４．発表年 2019年

１．発表者名 夏木大吾・太田圭・青木要祐・張恩惠・萩野はな・國木田大・佐藤宏之・熊木俊朗
２．発表標題 北海道遠軽町タチカルシュナイ遺跡M-I地点2019年度調査
３．学会等名 第33回東北日本の旧石器文化を語る会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 夏木大吾・太田圭・青木要祐・國木田大・出穂雅実・岩瀬彬・張恩惠・ファーガソン,ジェフリー・石丸聡・松崎浩之	４．発行年 2020年
２．出版社 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設	５．総ページ数 189p.＋PL.1-20
３．書名 東京大学常呂実習施設第16集：日本列島北部における新石器型狩猟採集社会の形成過程－タチカルシュナイ遺跡M-I地点の研究－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	國木田　大 (KUNIKITA DAI) (00549561)	東京大学・人文社会系研究科・特任助教 (12601)	
研究協力者	岩瀬　彬 (IWASE AKIRA) (70589829)	首都大学東京・人文科学研究科・助教 (22604)	